



Title	達成プロセスと成功・失敗経験の意味づけ
Author(s)	上野, 淳子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44169">https://hdl.handle.net/11094/44169</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名 上野淳子  
 博士の専攻分野の名称 博士（人間科学）  
 学位記番号 第17475号  
 学位授与年月日 平成15年3月25日  
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
 人間科学研究科人間科学専攻  
 学位論文名 達成プロセスと成功・失敗経験の意味づけ  
 論文審査委員 (主査)  
 教授 藤岡淳子  
 (副査)  
 教授 三木善彦 教授 秦政春

### 論文内容の要旨

実生活における達成プロセスと達成経験の持つ意味について、包括的かつ個人の認知を重視する立場から研究を行った。

第1章では、これまでの達成動機研究の流れをまとめ、Weinerの達成動機づけ理論をはじめとする帰属論的理論を概観し、そのアプローチの有効性と問題点について論じた。様々な達成動機研究における理論や実証研究で得られた結果、また目標研究・ライフイベント研究・コーピング研究などその他の研究領域におけるアプローチも検討した結果、特に考慮すべき4つの達成プロセスが導き出された。まず、個人の努力の形態や努力観を含む「達成にまつわる努力」、目標の客観的領域と主観的性質から成る「目標」、原因帰属である「結果の処理」、後の人生に与える影響をさす「達成経験の影響」である。「達成にまつわる努力」は「目標」と「結果の処理」に関係し、「目標」は「結果の処理」と「達成経験の影響」に関係する。また、「結果の処理」も「達成経験の影響」に関係すると考えられる。以降の章では、それぞれの内容と関係について、大学生を対象とする質問紙調査の報告を行った。

第2章では、「達成にまつわる努力」について研究1、2を行った。努力動機を収集・類型化して検討したところ、従来の心理学の理論では無視されていたが社会学・教育学で指摘されていた努力の形態の存在が実証された。

第3章では、「達成にまつわる努力」「目標」「結果の処理」について、研究3、4、5を行った。研究3では、自我関与の高い達成経験を得るために自由記述の必要性が示され、自由記述を用いた研究4、5では、目標の学業・スポーツといった客観的領域や重要性などの主観的性質、そして個々人の努力観によって帰属様式が異なることが示された。

第4章では、研究5の続きと研究6の結果を示し、「目標」「達成経験の影響」を検討した。結果、成功・失敗経験とも時間の経過にしたがってプラスに評価されてゆく傾向が見られたが、その具体的な内容や評価の変化の様式には学業・スポーツ領域で違いが見られた。達成経験の影響の規定因を検討したところ、目標の主観的性質や原因帰属はほとんど規定因として作用せず、達成前後の認知よりもその後の生活の中でどのような内容の影響を見い出すかが重要であることがわかった。

第5章では、得られた知見について総合的考察を行い、新たに浮かび上がった問題の展望を行った。特に、上記の研究で度々見い出されたが従来の研究では注目されてこなかった、達成プロセスにおける「協力・支援する他者」の役割と、自由記述で自我関与の高い内容を得るという方法の有効性と限界について今後の研究の必要性が強調された。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、実生活における達成プロセスと達成経験の持つ意味について、包括的かつ個人の認知を重視する立場から研究を行っている。

具体的には、達成に関する4つのプロセス、すなわち「達成にまつわる努力」、「目標」、「原因帰属である結果の処理」、「達成経験の影響」の相互関係を実証的に検討した。

特に、注目すべきは、学業でもスポーツでも、成功体験はプラスの主観的評価が維持されるが、失敗体験では、学業の場合、しばらくマイナスの評価が続くが、その後三分の一程度はプラスに転化するのに対し、スポーツにおいては、プラスへの変化が大きいという実証的所見である。

本研究における、達成プロセスに関する実証的研究は、教育心理学の基礎を成すものとして有益である。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。